

「複合社会」をのりこえる

— 独立期マラヤにおける国民語問題と国民「主体」形成 —

井 口 由 布

Overcoming the “Plural Society”: The Question of National Language and the National “Subject” Formation in the Independence Period Malaya

IGUCHI Yufu

1 はじめに

本稿では、マレーシアにおける国民化という問題を思想的にどのように読み解いていくかということを中心課題としてとらえたい⁽¹⁾。なかでも、独立期マラヤにおいて国民語の問題をめぐって交わされた諸議論をとりあげ、国民的「主体」の構想が「複合社会」的現状を乗り越えようという試みにおいてなされていたことを跡づけたいと考えている⁽²⁾。そのさいにとくに強調したいのは、国民をめぐる構想がひとつではなく、さまざまな可能性が提示されたことであり、国民「主体」の形成がなされたのはそれらによる衝突と合意の過程においてだったのではないかということである。

「複合社会」論とは、J・S・ファーニヴァルの『蘭印経済史』(1939)において登場し、これ以降マラヤならびにマレーシアについて認識するさいの基本的な枠組みを提供しつつしてきた⁽³⁾。「複合社会」論とは、植民地的な領域が相互に連関を持たない複数の諸社会から成り立っているということを指摘するものである。「社会」を有機的な統合体とみなすこの議論のもとでは、相互に連関を持たない複数の社会からなる植民地的領域は社会とはみなされない。すなわち、「複合社会」には、あるべき統合された社会からの逸脱もしくは遅れのイメージがつきまとうことになる。マラヤ／マレーシアを「複合社会」とみなすということは、現状をあるべき統合された社会からの逸脱もしくは遅れとして、したがって変革され乗り越えられるべき状況としてみなすということである⁽⁴⁾。

本稿は「複合社会」論を、20世紀半ばにおいて出現した、マレー半島の現状を知覚するひとつの方法としてとらえているのであり、実体としての「複合社会」の成立について議論しているのではない⁽⁵⁾。マレー半島は19世紀末にはすでに、植民地における諸経済活動を支える中国やインドなどからの移民が到来し、ファーニヴァルのいう「複合社会」的状況にあっ

たといえる。しかしながら、R・J・ウィルキンソンが編集したはじめての総合的マレー研究である *Papers on Malay Subjects* の記述からも明らかなように、20世紀初めにおいてさえマラヤは「複合社会」として知覚されておらず、中国系やインド系の移民社会は本国との関係で論じられ、マラヤ社会の構成要素とはみなされていなかった (Iguchi 2001)。

以下においてとりあげるのは、一般的にはマレー人保守派と呼ばれる人々の論考である。マレー人保守層は、マレー語をマラヤの国民語とすることで合意していたが、マラヤの他の諸民族の言語や文化をいかにみなすかという点において微妙なちがいがあった。ここでは、1950年に結成された文学者グループ *Angkatan Sasterawan '50* (ASAS'50) によってマラヤ独立前に交わされた国民語論と、雑誌『デワン・バハッサ』(Dewan Bahasa) に創刊の1957年と翌年の1958年に掲載されたマレー語にかんする編集記を検討し、国民語にかんしてあるべき姿として構想されたものがいかなるものであったのか、それが「複合社会」的状況をいかなるかたちで乗り越えようとするものであったかをみてみることにする。

2. 道具としての国民語とコスモポリタンな過去の想起

—— ASAS '50 のマレー語観

独立直前のマラヤでは、マレー語が独立マラヤの国民語となるという合意がある程度まで達成されていた。1954年マラヤ連邦立法議会において、マレー半島における国民語をマレー語とする決定がなされた。1955年の総選挙で与党となった連盟党(マレー系中心の政党UMNO, 中華系中心の政党MCA, インド系中心の政党MICからなる)は、「総選挙のための声明文」において、マレー語をこの国の国民語として採用することを連盟党の目標に掲げていた。1956年8月には当時の教育大臣ラザクにより「教育委員会報告書」(通称「ラザク・レポート」)が提出され、「文化・社会・経済・政治の分野において一つの国民としてマラヤの住民の希望を満たすための国民教育の方針」(Razak Report 1956: 1)が提案された。ラザク・レポートによる国民教育の方針は、マレー語を国民語としたうえで、この国に住む他の諸民族の言語と文化を守るという目標をともなっていた。

マラヤ独立の1年前である1956年9月に開催された第3回マレー言語文学会議において、マレー語文学者のグループであるASAS'50は国民統合のために国民語が必要であることを以下のように述べている。

ASA'50の闘いは、マレー語とマレー文学の賛美者による闘いである。これは、独立達成には国民的(kebangsaan)統一が必要であるという政治的社会的意識によって推進されている。独立は社会正義、国民(bangsa)の発展、人類の平和への架け橋である。ASA'50はその成立以来、言語と文学が独立への国民的統一の道具であり、国民の思想を社会正義、発展、平和という希望とともに進展させる道具であるという信念のもとに活動してきた(Keris Mas & Usman Awang 1987: 27)。

マーガレット・ロフも指摘するように、当時、マレー語をマラヤの国民語にすることにはおおむね同意が得られていたというが、これにたいする否定的な見解が全くなかったというわけではなかった(M. Roff 1967: 316)。ASA'50のメンバーによる以下の文章からは、英語を推進する人々が少なからず存在したことが示唆されている。

言語問題の解決には、この国のおおの民族が民主主義のプロセスに参加する権利を承認することが必要であり、個々において一つの言語がリンガ・フランカとして発展し、民族同士の伝達の道具となる。このリンガ・フランカはマラヤの民族の言葉から選ばれ、この国の人民の多くの人に理解されねばならない。英語はその条件を満たしていない。……さまざまな民族のあいだの伝達の言葉で最も多くの人が話せるのはマレー語である。("Memorandum Kepada Suruhanjaya Perlembagaan Rendel" 1987: 6-7)

またASAS'50は、ラザク・レポートが提出された後すぐに、マレー語を国民語とするのに十分な方針を示していないことを批判し、独立後10年でマレー語を国民語とする希望を保証しておらず、英語の地位が強固となる結果になるという危惧を表明している(Kamaludin Keris Mas, Mohd. Ariff Ahmad, & Asraf 1987: 21-22)。

マレー語の国民語化にたいして否定的な態度をとる人々の意見には二つの方向性があると思われる。一つは、その当時のマレー語の状態にかんするものである。マレー語の国際的な地位が低いこと、近代的で高度な知を伝達する段階にいたっていないことなどは、マレー語の国民語化を推進するASAS'50によっても指摘されていた。じじつその当時のマラヤではマレー語での高等教育も一般的ではなく、マレー語には近代的な知を伝達する資質がないと考える人々も多数存在したのである。英語を推進しようというのはこのような理由による。

もうひとつの方向性は、マレー語がマレー人の民族語であるということに力点をおいたものである。おおの移民社会からはみずからの文化と遺産を存続したいという強力な要求がありつづけており、マレー語の国民語化は、マレー人以外の人々の文化や社会がマレー文化や社会へ同化させられ消滅してしまう不安を呼び起こした。これらの人々が「複合社会」的状况を超克してめざそうとするのは、今でいう多文化主義的な国民国家であるといえよう。しかしながら、これらの人々が恐れたのは、マレー語の国民語化がマレー文化への同化をもたらし、それによって生みだされる単一の民族からなる国民国家がめざされていることである。そこでこれらの人々は、中国系の住民を中心に、中国語などの非マレー人の民族語をもマラヤの公用語とすることを要求するようになる(Roff 1967: 318)。ただし、ロフによれば、中国語の公用語化の要求は、マレー語を国民語とすることに同意したうえでなされており、英語を価値中立的な言語と考えて各民族を媒介する国民語とするということをとまっていたわけではなかった(ibid. 318)。

マレー語の国民語化を推進する立場のASA'50らは、英語が植民地宗主国イギリスの言語であり、植民地政府とむすびついたエリートの言葉で、マラヤに居住する多くの人々の共通言

語にはなりえない、と英語の使用を推進することを批判する。そこでASAS'50は、国民語が外来語ではなく、少なくともマラヤのいずれかの民族の民族語に由来すべきであると主張し、なかでもマラヤの住民の多くが話すことのできるマレー語こそが国民語の地位にふさわしいという。しかしながら、マレー語がマレー民族のみを代表するようであっては、マレー語の国民語化が非マレー民族のマレー民族への同化と同一視されることになる。そこでASAS'50は、マレー語がマレー民族の魂や精神を体現しているというようなスローガンを注意深くさける。かわりに強調されるのは、マレー語が国民統合のための道具として、意思の伝達の道具として、いかに適切で優れているかであり、現在十分でなくても、変革の可能性があるということであった。上でも記したように、ASA'50にとって言語や文学は、「民族同士の伝達の道具」、「国民的統一の道具」であり、「国民の思想を社会正義、発展、平和という希望とともに進展させる道具」である。このようにASA'50の国民語論では、マレー人のためのマレー語という表現を回避しようとする試みがなされている。しかしながら、マレー民族とマレー語を有機的に結びつけるような、過去への回帰の志向がまったく認められなかったということはない。

栄光の過去への回帰の志向は、マレー語を整備して国民語にふさわしい言語にしようとする実践においてみることができる。その一つとして、ローマ字綴りの採用に端を発した、スタンダードなマレー語を探求しようという試みがあげられるだろう。マレー語にはアラビア文字によるもの（ジャウイ）とローマ字によるものの二つの表記法がある。第3回マレー言語文学会議において、アスラフとウスマン・アワンは、発音どおりの表記をめざすならば、マレー語の表記にはアラビア文字より母音の数の多いローマ字の方が適していると報告した（Asraf & Usman 1987: 10 - 20）。このような理由から、第3回マレー言語文学会議は、ローマ字による表記法を公式の表記法として採用することを提言した。

だが、いったいいかなる発音が、表記にふさわしい正しい発音なのだろうか。この問いへの一般的な答えとしてあげられるのは、16世紀のマラッカ王国時代のマレー語の発音である。もちろん、16世紀の発音など誰も知ることはできない。そのために、マラッカ王国の継承者である古ジョホール王国のあった、リアウ・ジョホールにおける発音こそがマレー語の正しい発音であるといわれてきた。1950年代において使用されていた二つのローマ字による表記法（インドネシアのOphuysen Soewandi方式とマラヤのウィルキンソン方式もしくはSekolah Ejaan方式）は、両方ともリアウ・ジョホール地方の発音に基づいて作成されたという（Asraf 1987: 89）。さらに、1950年代において標準とされたRadio Publik Indonesiaのアナウンサーの発音は、このローマ字によるつづりを正確に再生したものであった（ibid. 95）。しかしながら、アスラフによれば、1950年代当時のリアウ・ジョホール方言は、正しいといわれる発音、すなわちつづりどおりの発音とは異なっていた。かれの報告では、マレー半島で話されるマレー語を発音によって七つの方言に分類し、それにインドネシアのミナンカバウ地方とジャカルタを加えて、つづりと比較した結果、つづりどおりに発音する地域は存在しなかった。すな

わち現在のリアウ・ジョホール地域においてさえ本来のマレー語の発音が消滅しており、マラッカ王国時代の本来的なマレー語の発音が残されているのは、ローマ字のつづりのなかだけであるというのである。それゆえ、アスラフによれば、マレー語の発音が統一されるには、人々がローマ字のつづりどおりの発音を心がける必要があるのである。言いかえれば、ローマ字のつづりどおりの発音を心がけることによって、国民語としてのマレー語は「未来へ向かって制作されなければならないものとして構想」され、「そうして投射された未来の目標へと至る軌跡は、喪失された本来性への回帰」の過程として空想されているのである(酒井1996: 206)。

マレー語をマラヤの諸民族の国民語としようということにおいても、たしかにマレー人の均質な共同体という過去への回帰の志向は完全に消されているわけではなかった。だが、新しいかたちの過去を想起しようという試みも存在した。それは、マレー語がマレー人の民族語であっただけでなく、かつてマレー諸島における共通のリンガ・フランカであったというものである。以下はASA'50のメンバーによる第3回マレー言語文学会議における報告からの引用である。

ある民族(bangsa)の感情と思想を生む道具として言語はその民族の財産であり、その意味で重要なものである。というのも、一方で言語は交流の道具であり、社会の闘争と発展の道具となるからである。この構造においてマレー語の位置が考えられなければならない。その位置とは、さまざまな民族(bangsa)からなるマラヤ社会の統一のための言語、マラヤ社会の文化のための言語、マラヤ社会の関係性[構築]のための言語、マラヤ国家の言語の位置である。マレー語はこの任務を果たすことができるだろうか。マラヤは複合社会(masyarakat majmuk)であり、それぞれの言語と文化を持つ民族(bangsa)から構成されている。国民(bangsa)の統一には言語の統一が根本要素である。だが、現状ではマレー語はこの任務を果たしていない。…マレー王国時代にはマレー語は発展をし、マレー諸島とその周辺において使用され、思想的に高度なことを表現できる言語であった。西洋の到来が平和を揺るがしたが、植民地時代においてもマレー社会と言語は一定の進展をしていた。だが、新しい発展の達成はなかった。マレー語は文法構造がしっかりとしているので、外国語の影響のもとにあっても抹殺されることはなかった。…イギリス人、中国人、タミル人の到来により単一民族社会は複合社会へと変貌を遂げたのであるが、第二次世界大戦が終わってはじめて民族(bangsa)の統一と言語の統一の夢を語るできるようになった。日常的にはさまざまな言葉をしゃべっても、人々はマレー語の重要性を意識しはじめてきた。もちろんマレー語を使用しない人も多数いる。これを強制することはできないからだが。言語の統一とは、マラヤとインドネシアにとっての成果であるだけでなく、栄光の過去を再現することになる。(Abdullah & Masuri 1987: 41-46)

上の文章によると、マレー語は、マラッカ王国の言語であるだけでなく、マレー諸島地域における国際語の役割を果たした、高度に発達した言語であった。その意味において、マレー語を現在のマラヤにおいて国民語とすることは、かつてのマレー語の地位を取りもどすことであり、外国貿易によって栄えた植民地時代以前の栄光を復活させることなのである。

このようにASAS'50にとって、「複合社会」を脱して国民統合をするということは、マラヤに居住するばらばらの諸民族が統合して、新しい国民となることであった⁽⁴⁾。そこで、新しい国民の国民語としてのマレー語は、過去における均質で統一されたマレー人共同体の言語としてよりもむしろ、コスモポリタンなマレー世界において高度に発達したリンガ・フランカとして想像されることとなった。

3. 道具から精神へ——『デワン・バハッサ』誌における国民語論

デワン・バハッサ・ダン・プスタカ (Dewan Bahasa dan Pustaka) は、マレー語を国民語として発展させるためのプロジェクトを実施したり調査研究ならびに出版をおこなう機関として設立された。雑誌『デワン・バハッサ』は、マラヤ独立の1957年9月に創刊され、以降マレー語やマレー文学にかんする論考の主要な発表場所として機能している。

1957年から1958年の『デワン・バハッサ』誌においても、基本的にはASAS'50と同様に、国民語をととしてバラバラの諸民族が統合して新しいひとつの国民となるという構想が語られた。「われわれが直面しているのは以下のことである。マレー語が国民語となり、これによってさまざまな民族 (kaum) からなるわれわれを束ね、ひとつの国民 (bangsa) となることである ("Rencana Pengarang" April 1958: 121)」。また、マレー諸島とマレー半島におけるリンガ・フランカとしてのマレー語の過去も想起され、そのことが、マレー語がマラヤの国民語として適切であることの理由となっている。「マレー語が国民語となる権利を有しているのは疑いようがない。というのも、マレー語は何世紀にもわたってマレー諸島におけるリンガ・フランカであり、すべての民族集団 (kaum) によって使用されている」 ("Dari Meja Pengarah" Jun 1958: 269)。さらに、今日の「複合社会」の諸民族のあいだでもマレー語はもともと主要な伝達語、諸民族のリンガ・フランカとなっている ("Rencana Pengarang" Mei 1958: 218)。

先にも述べたように、ASAS'50は言語を国民統合のための「道具」として強調し、マレー語とマレー人との有機的なつながりを示唆するような「魂」や「精神」のような言葉を注意深く避けていた。しかしながら、『デワン・バハッサ』誌では、言語は国民の精神や生命と結びつけられて論じられることが多くなっている。それはたとえば「言語は国民の精神」 ("Bahasa Jiwa Bangsa") というデワン・バハッサ・ダン・プスタカのスローガンにもみられ、「雑誌『デワン・バハッサ』は、"Bahasa Jiwa Bangsa" (言語は国民の精神) を達成するための道具である」 (Syed 1957: 7) というように、いまや道具であるのは雑誌のほうである。

独立前のASAS'50の論考においては避けられていた「精神」の強調が、『デワン・バハッサ』誌で主張されるのは、英語の地位を意識したものであろう。ASAS'50がこれまでいってきたように言語が国民の統合のための道具であるならば、なにもマレー語にこだわらなくてもいい、ということになる。そこで、たんなる便利で優秀な道具としての英語にたいして、マ

レー語は道具以上のもの、国民の精神を体現する可能性があると言主張するのである。以下は、『デワン・バハッサ』誌の編集記に寄せられた文章の一部である。

ひとつの国民(bangsa)として発展するには諸道具が必要であり、言語はそのうちのひとつである。発展のための知識を獲得するために言語は道具として必要である。なかでも英語は、世界で認められた言語であり、イギリス植民地において使用されていた。しかしながら、深く考えれば明らかなことであるが、真実の敬愛はわれわれ自身のうちにあるはずで、道具にはないのである。その意味で、英語はたんなる道具である。それにたいして国民語とはわれわれの固有性(pribadi)である。国民語が[国民の]固有性であることは世界中で認識されていることである("Rencana Pengarang" Jun 1958: 271)。

国民語はたんなる道具であってはならない。国民語は国民という有機的な身体に宿る精神でなければならない。だが、マラヤにおいて国民という身体はあらかじめ与えられているものではない。「複合社会」状況たるマラヤにおいて国民は欠如しているのである。その欠如は、植民地主義的支配によってもたらされたものである。植民地主義は、民族的なものを博物館に保存するための過去の死者の遺物としてしまった。以下の『デワン・バハッサ』創刊号の編集記は、植民地主義的支配が民族的なものの固有性を弱体化させ、損傷を与えたことを指摘している。

植民地化された民族にとって、独立は大きな意味を持つ。植民地主義は侮辱を、独立は高貴をあたえる。植民地の結果を破壊するのは、独立が達成されたあとも長く続く、重い責務である。このことはすべての分野でおこなわれなければならない。というのも、植民地支配はすべての面においておこなわれたからだ。("Rencana Pengarang" September 1957: 9)

植民地支配によってわれわれは西洋文明を受け入れた。西洋文明じたいは悪いものではないが、植民地支配の過酷さによって、われわれは必要としないものまで必要とせざるをえなくなった。すなわちわれわれの民族(kebangsaan)の独自性に災難が与えられたのだ。言語は民族に固有(peribadi kebangsaan)のもので、「言語は民族の精神」というスローガンのとおりである。植民地支配者によって言語は、これ以上発展することのない古代の古典的なものとして守られた。われわれの生活と思考法における民族の固有性の要素は壊れた。われわれは弱い民族となり、統一をはたしてみずからの民族的独自性の上に立とうという信念を持てなかった。(Ibid.: 10)

上の文章から読みとれるように、民族的な固有性は、植民地主義によって古典的なものとして保護され、その結果、生きて成長するものではなくなってしまった。それでは、植民地主義によって破壊され、喪失した民族性を回復するためにはどうしたらよいのだろうか。そこで、国民語を学ぶことをとおして、民族的な「主体」が未来へ向かって制作されるものとして構想されることになる。

独立したわれわれにとって、民族の独自性を守るのは重要な責務である。もっとも重要なのは、言語運動をすることである。これによって、人民 (rakyat) が全階層、全集団 (golongan) において、その精神のなかで生存し成長していく民族的要素が与えられるのである。(Ibid.: 10)

この編集記では、「われわれ」や「民族性」などの言葉で指示されているのが、はたしてマラヤの居住者全員なのかそれともマジョリティであるマレー系住民だけなのかという疑問がある。植民地主義によって民族の固有性が失われた欠如の状態として「複合社会」的状况があるなら、「われわれ」という言葉によって暗黙のうちに想定されているのは、植民地支配以前からマレー半島に居住していたということになっているマレー系住民を指していることになるだろう。つまり、「植民地支配によって西洋文明をうけいれたわれわれ」はマレー系住民であり、「災難を与えられたわれわれの民族性」は、「われわれマレー人」の民族性ということになるだろう。また、「独立したわれわれにとって、民族の固有性を守るのが重要である」というときにも、「われわれマレー人」が念頭に置かれているようである。すなわち、マラヤにおける非マレー系の人々は、ここにおいて「われわれ」に含まれていないのである。「われわれマレー人」以外のマラヤの住民が登場するのは、言語運動という実践に言及するさいの、全階層、全[エスニック]集団をふくむ「人民 (rakyat)」という言葉によってである。ここで、人民すべてが、国民語を獲得することをとおして、マラヤの国民性が事後的に獲得されることが指摘される。同様のことが、独立の翌年の編集記においても読みとれる。

われわれにとって不可欠なのは、国民語への愛の精神をこの国の人々すべてに植えつけることである。さらにその責務をはたすために、この言葉をすべての分野にとってふさわしいものとするための努力を怠ってはならない。何百年も抑圧され続けた国民語を価値づけ、愛し、学ぶ精神には、何倍もの力と強い魂が必要である。("Rencana Pengarang" Jun 1958: 271)。

「われわれ」マレー人が、非マレー人をふくむこの国の人々のすべてに、マレー語の愛の精神を植えつける、という。「われわれマレー人」とわれわれ以外のマラヤのすべての人民が、抑圧され失われた「われわれマレー人」の民族性を国民語としてのマレー語を学ぶことをとおして獲得すること。そのことが、欠如した国民的「主体」を回復することになる、という具合である。

ASAS'50の国民の構想では、失われた雑種的でコスモポリタンな過去を未来へ向かってとりもどすことが試みられ、マレー語は、マレー人の民族語というよりは、もともとコスモポリタンなマレー世界におけるリング・フランカと考えられていた。しかしながら『デワン・バハッサ』誌では、植民地主義によってもたらされたのは、「われわれマレー人」の民族性を危機に陥らせる移民社会の並存という「複合社会」的状况である。この状況を超克するのは、「われわれマレー人」が、失われた「われわれマレー人」の共同性を未来へ向かってとりもどすことである。マラヤにおける「われわれマレー人」以外の人々も、この作業に参加すること

が要請される。ここにおける国民のイメージは、ばらばらの諸民族集団が平等に溶解していく「るつぽ」ではなく、「この国」と有機的に結びついたマレー的なものへ、マレー民族以外の人々が溶解していくものようである。

さらに、『デワン・バハッサ』誌の論者らにとって、マレー的なものは、マラヤの土地とむすびついた自然なものとされる。そのため、マレー語が国民語としてふさわしい理由を説明することはもはや必要ないかのようである。

今日にいたるまで、なぜマレー語が国民語となったのかを説明するのは、マラヤの国民の半分には重要なことのようにだ。マレー語を国民語としたことにより、マレー人がよりたくさんの特権を享受することになるというような意見を聞くと、人々(rakyat)は混乱する。こうした説明により、つぎのような訴えが出てくる。マレー語を国民語とすることで、非マレー人の言語ははしのほうへ追いやられ、かれらの文化は滅ばされてしまうのでは、と。これは政治的な問題であるが、われわれとしては政治的討論に荷担するわけではない。この雑誌は、言語と文学の雑誌であり、「言語は国民の精神」であり、国民語は「国民(bangsa)の精神」であるという希望を実現させるものである。マレー語が国民語となったのは、マレー人の特権を守るためではなく、非マレー人の文化を壊すためのものでもない。われわれはすでに気づいているはずである。独立した国において英語を公用語として使用するのは終わりにすべきであると。英語の使用は、強制されたものであった。ひとつの国民(bangsa)としてやっと独立したわれわれは、国民(kebangsaan)を束ねる道具を持たなければならぬことに気づいた。この国における英語の地位は、植民地支配当時のように最高の地位ではないことに気づいた。そうした意識によってわれわれはマレー語が国民語の地位にあることに気づいた。("Rencana Pengarang" Mei 1958: 216-217)

ここで編集者は、マレー語が国民語であるべき理由や、非マレー語の地位がどのようにに変化するかについてはなにも述べない。そのような疑問はすべて保留して、有無をいわずに、マレー語が国民語であるということに「われわれは気づいた」という。この「気づいた」という言い方によって、マレー語の国民語化を、論争の必要性のないあるべき自然な状態としてしまうのである。それでも不満を持つ人々(=かれら)は、「われわれ」国民にとって狭小な自己中心主義とされる。

マレー語よりも国民語に適した言語を誰も見つけることはできないだろう。あるのは、マレー語が国民語になったら、非マレーの(中国やタミル)の言語は、はしに追いやられるのではという不信を示す自民族中心主義的(kaum)な文句である。(Ibid. 217-218)

上の文章から明らかなように、ここでは、マラヤに居住するさまざまな民族の多文化主義的な併存は考えられていない。マレー的なものの主張は当然で、国民的であるが、他の民族的なものを主張することは狂信的な自民族中心主義とされてしまうのである。

このように、マラヤの国民化は、「るつぽ」でも、多文化主義的なものでもなく、マレー的なものへの同化をとおして構想されているのである。このことは、以下にみられる、新しく

形成されるだろうマラヤの国民文化についても共通していた。

マラヤ連邦の国民語としてマレー語が受け入れられるということは、この国の国民文化の基盤を探すという夢にも結びつく。[中略]独立の時代におけるマラヤ国民文化の土台として受け入れられうる文化という可能性にマレー文化を結びつけることなくマラヤ文化を語るならば、「国民的な」(national)ものをかたちづくる成果がもたらされることはないだろう。[中略]上記にたいして持ちあがる問題がある。というのも、やっと独立したマラヤ連邦は、それぞれ独自の文化を持つ、さまざまな系統の民族によって成立しているからだ。それらの文化は先祖からの遺産なので、それらの民族 (kaum dan bangsa) の文化を捨て、違う文化を身につけよと強制するのは難しい。この国において、さまざまな文化と生き方が合流するだろう。マレー、中国、インドのあいだにおいてだけでなく、西洋文明とのあいだにおいてもである。われわれが国民文化の基盤を探さなければならない理由は、この基盤の存在によってのみ、この国のさまざまな民族 (kaum) による文化変容 (socialization) の発展をナショナルなかたちの文化形成へと進めることができるからだ。このナショナルな文化は、この国のある文化による他の文化の抑圧を必要とするものではない。[中略]マレー文化が国民文化の諸基盤として適しているならば、マラヤ連邦における文化変容の側面について深く考慮する必要がある。抑圧である同化 (culturization) は健やかな国民文化を招かない。マレー文化がマラヤの国民文化の諸基盤となると可能性は強い。しかしその実践はさまざまな系統からのさまざまな文化によるわれわれの社会における文化変容の側面からなされなければならない。そして植民地支配の時のような同化であってはならない。マレー文化を国民文化の基礎として受容することは、マレー語を国民語として受容することと同様である。以前のように公用語として英語を受容することではない。この国の子供たちを抑圧する西洋文明を受容するのとは異なるのである。("Rencana Pengarang" Januari 1958:5-7)

各民族の文化が合流してできる新しい国民文化は、マレー文化に基づいているものであるが、西洋による植民地主義的支配によってもたらされた抑圧的な同化ではないという。『デワン・バハッサ』の論者たちは、英語を諸民族の伝達語としたうえで諸民族の言語を併存させるという多文化主義的な要求、もしくは、マレー語を国民語としたうえで中国語やタミル語を公用語とするという譲歩案ですら、狂信的自民族中心主義であると断罪する。そのうえで、マレー語を国民語として使用するという日々の実践をとおして、自発的にマレー的なものへ同化することが要請されるのである。

4 むすびにかえて——ザッパの民族構想

ここまで、独立前後の時期における、マジョリティであるマレー人の、とりわけ保守層によって抱かれたマラヤ国民のイメージについて、国民語にまつわる議論から検討してきた。マレー語を国民語とすることでは共通していたが、「複合社会」の他の構成民族の扱いについて、論者のあいだで微妙なちがいがあった。ASAS'50による独立前の議論は、マレー語を徹底的に道具としてみなし、マレー語とマレー人の必然的な結びつきを強調する「精神」などの言

い回しを避けていた。しかしながら、独立後に創刊される『デワン・バハッサ』誌では、「精神」という言葉が積極的に使用される。ただしこの「精神」は、あらかじめ与えられているものではなく、植民地主義によって奪われ、失われてしまったものである。さらに、非マレー人にとってもマレー人にとっても、マレー語をあらためて学ぶということによってのみ獲得できるものと考えられた。マレー人と非マレー人がマレー語を実践的に使うことで、「マラヤ的なもの」をえることができる、というのである（"Rencana Pengarang" Mei 1958: 218）。ここでは、マレー的なものはマラヤという空間とむすびついた自然なものと考えられ、マラヤにおいてマレー文化に認められる普遍性は他の民族の文化には認められないばかりか、マレー文化以外を強調することは偏狭な自民族中心主義とされてしまうのである。

マラヤにおける国民的な「主体」は「複合社会」的状况を乗り越えることで構想されたが、ASAS'50と『デワン・バハッサ』誌のいずれにおける構想も、マラヤという植民地主義的枠組みを前提としていた。しかしながら、マレー人保守層としてみなされるザイナル・アビディン・アフマド（通称ザッパ）においては、マラヤにおける「複合社会」的状况をマラヤという空間を乗り越えることで超克しようとする構想がうかがえる。これはマレー人左派の主張にも結びつくものであり⁽⁶⁾、そこではマラヤとインドネシアの合同を中心としたマレー民族による大インドネシア結成が思い描かれていた。

マラヤ大学マレー研究科初代研究科長でありマレー語の父とも呼ばれるザッパは、20世紀の前半からマレー語にかんする所論を書きつらね、マレー語がマレー民族の精神であると主張してきた⁽⁷⁾。マラヤ独立後においても『デワン・バハッサ』誌に論考を精力的に発表する。他の論者が非マレー人を多少は意識しているのにたいし、ザッパの論考にはそのような態度はほとんどみられず、読者をマレー人のみに限定しているかのようである（Za'ba 1957: 24）。かれはマラヤにおける非マレー人の問題にはほとんど関心を向けず、かわりにかつては同一であったはずのインドネシア語とマラヤのマレー語の統合の問題に心を砕く（Za'ba 1956, 1957）⁽⁸⁾。このときのザッパの目前にあったのは、「複合社会」状況をマラヤという植民地的空間を解体することによって乗り越えた、マレー諸島地域を包括するマレー人の共同体であろう。だが、まさに植民地主義によってもたらされたこの地域の移民社会は、ザッパの目にはまるで見えないかのようである。

注

- (1) マレーシアにおける国民的「主体」の形成にまつわる問題にかんして、これまでにさまざまな研究がなされてきている。たとえば、ヴァージニア・マテソンは、植民地時代以前の古典文学の分析から、「マレー」という言葉の意味の変化について論じ、「マレー」が人種や民族を示すようになったのが19世紀であることを明らかにした（Virginia Matheson, "Concepts of Malay Ethos in Indigenous Malay Writings" *Journal of South-east Asian Studies* Vol. 10, No.2 (1979)）。ただし、マテソンの議論からは、マレー民族が歴史的に構成されてきたことまでもが示唆されているとまでは読みとれず、逆に、マレー民族が実体としては超歴史的に

存在してきたもののそれを示す言葉がなかったと論じているようにも受けとれる。その意味においてアリフィン・オマルの著書『バンサ』も同様の問題を抱えているように見える (Ariffin Omar, *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community 1945 - 1950* [Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1993])。これにたいして、アンソニー・ミルナーの最近のマレー政治思想史にかんする研究は、民族が歴史的に構成されてきたという立場を表明している (Anthony Milner, *The Invention of Politics in Colonial Malaya: Contesting Nationalism and the Expansion of the Public Sphere* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994))。ミルナーは、植民地時代において新しく出現した政治にまつわる言説を分析することで、前近代的な政体であるクラジャアン (kerajaan) が掘りくずされて、自由で合理的な個人による近代的な「政治」が創造されるありさまを論じている。ウィリアム・ロフに代表されるこれまでのマレー思想史研究がマレー社会の統一性に重きをおいてきたのにたいし、ミルナーは、マレー社会のイデオロギー的分裂や紛争的側面に焦点を当てている。だが、ミルナーの方法では、近代的な「政治」の創造がマレー民族の創造とどのようにかかわっているのかが明らかにされておらず、クラジャアンというマレー社会における前近代的な政体をもちだすことから、マレー社会の前近代からの連続性が分析の暗黙の前提となっているようにみえる。また、自由で合理的な個人による近代的な「政治」なるものについて、そうした「政治」を達成せよという要請もしくは命令としてそれを問題としているのか、それとも最終的には実体としてみなしているのかにかんして疑問が残る。

- (2) マラヤにおける言語政策や国民語にかんする議論を扱ったものとしては、M. Roff (1967), Asmah Haji Omar, *Bahasa Malaysia in the Context of National Language Planning* (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1976), 同“Education System and Language Planning in Malaysia: An Account of Efforts to Make Malay the Medium of Education” Working Paper for World Congress of Sociology, 8th Bahagian Perancangan Bahasa, Tronto, Ogos, 1974, 同“Bahasa Malaysia dan Perpaduan Negara” *Perancangan Bahasa Dengan Rujukan Khusus Kepada Perancangan Bahasa Malaysia* (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1985), 同 *The Teaching of Bahasa Malaysia in the Context of National Language Planning* (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1976), Ismail Hussein, *Sejarah Pertumbuhan Bahasa Kebangsaan Kita* (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1984), Mohd. Taib Osman, *An Introduction to the Development of Modern Malay Language and Literature* (Singapore: Donald Moore for Eastern University Press Ltd., 1961, Revised edition published by Times Books International in 1986), 左右田直規「独立期マラヤの言語問題をめぐる政治力学——民族紛争規制の構造について——」(京都大学大学院, 修士論文, 1995年)などを参照のこと。
- (3) マラヤならびにマレーシアを「複合社会」とのかかわりにおいて説明しようとしているものとしては、たとえば、M. Freedman, “The Growth of Plural Society in Malaya” *Pacific Affairs*, Vol. 33 (1960). Graham Saunders, *The Development of a Plural Society in Malaya* (Kuala Lumpur: Longman Malaysia Sdn. Berhad, 1977), Barbara Watson Andaya and Leonard Y. Andaya, *A History of Malaysia* (London: Macmillan Asian Histories Series, 1982)の第5章, Zainal Abidin Abdul Wahid ed., *Glimpses of Malaysian History* (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1983)の第10章, S. Husin Ali ed., *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia — Ethnicity, Class and Developemnt, Malaysia* (Persatuan Sains Sosial Malaysia, 1984)などがあげられるだろう。
- (4) 「複合社会」にかんする議論には、しばしば混乱や行き違いがみられる。これは、「複合社会」論を論じるさいに、上で示したようなあるべき統合化された社会からの逸脱としての「複合社会」と以下に述べるような多文化主義社会としての「複合社会」の二つの解釈が存在しながらも、これらを区別しないままに議論が進められているからである。「複合社会」を多文化主義社会へとずらして読もうとする解釈ででは、統合された社会の内部に下位集団としての複数の社会もしくは文化があり、それらが相互に関連しあい、その複数の社会のあいだには平等と調和が達成されているという状態が示唆されている。この解釈においては、複数の社会が相互に関連を持っているためにその上位にある領域は、統合された社会とみなされているが、最初の解釈では、複数の社会を従えた上位の領域は、統合された社会とはみなされていない。それゆえに、多文化主義社会へとずらされて解釈されている「複合社会」論は、国民国家のひとつのあり方として提起されるのである。すなわち、「複合社会」論における混乱の大きな理由とは、超克されるべき状況と、達成されるべき状況とが同じ言葉によって指されていることである。

- (5) 「複合社会」としてマラヤをまなざしているもっとも早い例は、マラヤ大学設立を提言するカール・ソーダースのレポートであろう (*Report of the Commission on University Education in Malaya* (Kuala Lumpur, Federation of Malaya: The Government Press, 1948))。
- (6) マレー人左翼の動向については、たとえば Ariffin (1993) を参照のこと。
- (7) ザッパによるマラヤ独立以前のマレー人とマレー民族にかんする議論にかんしては井口 (2002) を参照のこと。またバイオグラフィなどには、Abdullah Hussein dan Khalid Hussain ed., *Pendita Za'ba dalam Kenangan* (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1974), *Bahasa Kesusasteraan dan Kebudayaan Melayu: Essei-essei Penghormatan Kepada Pendita Za'ba* (Kuala Lumpur: Kementerian Kebudayaan, Belia dan Sukan Malaysia, 1976), Adnan Haji Nawang, *Za'ba: Patriot dan Pendeta Melayu* (Kuala Lumpur: Yayasan Penataran Ilmu, 1994), 同 *Za'ba dan Melayu* (Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn. Bhd., 1998) がある。
- (8) 表記法の統一に代表されるインドネシア語との統一問題は、ザッパだけでなく、さまざまな論者によって主張されており、第3回マレー言語文学会議における議題のひとつにもなっていた。

参考文献

- Abdullah Majid & Masuri S. N. "Perkembangan Bahasa Melayu Sekarang dan Akan Datang" *Memoranda* 1987.
- Asraf dan Usman Awang, "Memorandum Mengenai Tulisan Rumi Untuk Bahasa Melayu" *Memoranda* 1987.
- Asraf, "Bunyi Bahasa Melayu Dalam Ucapan" *Memoranda* 1987.
- "Dari Meja Pengarah: Mengkaji Sejarah Bahasa Kebangsaan" *Dewan Bahasa* Jilid II Bilangan VI (Jun 1958).
- Furnivall, J. S., *Netherlands India: A Study of Plural Economy* (Cambridge, 1939). 【ファニーヴァル『蘭印経済史』南太平洋研究会訳 (実業之日本社, 1942年)】。
- 井口由布『「主体」形成とマレー語の位置』『言語・地域文化研究』第8号 (東京外国語大学大学院, 大学院博士後期課程論叢, 2002年3月)。
- Iguchi, Yufu, "The Colonial Look in the *Papers on Malay Subjects*" 『言語・地域文化研究』第7号 (東京外国語大学大学院, 大学院博士後期課程論叢, 2001年3月)。
- Kamaludin Keris Mas, Mohd. Ariff Ahmad, & Asraf, "Memorandum Mengenai Penyata Pelajaran Persekutuan Tanah Melayu 1956" *Memoranda* (1987).
- Memoranda Angkatan Sasterawan '50* (Petaling Jaya: Penerbitan Fajar Bakti Sdn. Bhd., 1987, Edisi Pertama 1967).
- Keris Mas & Usman Awang, "Memorandum Kepada Kongres Bahasa dan Persuratan Melayu Yang Ketiga, 16-21 September 1956" *Memoranda* (1987).
- "Memorandum Kepada Suruhanjaya Perlembagaan Rendel 15 Dec. 1953" *Memoranda* (1987).
- "Rencana Pengarang, Merdeka: Masalah Bahasa Yang Di-timbulkan-nya" *Dewan Bahasa* Jilid I Bilangan I (September 1957).
- "Rencana Pengarang, Kongres Kebudayaan" *Dewan Bahasa* Jilid II Bilangan I (Januari 1958).
- "Rencana Pengarang, Menghadapi Masalah Bahasa Di-Pejabat" *Dewan Bahasa* Jilid II Bilangan IV (April 1958).
- "Rencana Pengarang, Latar Belakang Dari Bahasa Kebangsaan" *Dewan Bahasa* Jilid II Bilangan V (Mei 1958).
- "Rencana Pengarang, Kedudukan Bahasa Inggeris Di-samping Bahasa Kebangsaan" *Dewan Bahasa* Jilid II Bilangan VI (Jun 1958).
- Report of the Education Committee* (Kuala Lumpur, Federation of Malaya: The Government Press, 1956).
- Roff, Margaret, "The Politics of Language in Malaya" in *Asian Survey* Vol.7, No. 5 (May, 1967).
- 酒井直樹「死産される日本語・日本人 — 日本語という統一の制作をめぐる (反) 歴史的考察」『死産される日本語・日本人 — 「日本」の歴史・地政的配置』(新曜社, 1996年)。
- Syed Nasir bin Ismail, "Hidangan Majallah Dewan Bahasa" *Dewan Bahasa* Jilid I, Bilangan I (September 1957).
- Wilkinson, Richard James, ed., *Papers on Malay Subjects, First Series* (Kuala Lumpur: Federated Malay States Gov-

ernment Press, 1907-1911).

Zainal Abidin bin Ahmad, "Bahasa Melayu dan Bahasa Indonesia" Kertas Kerja di Kongres Bahasa dan Persuratan Melayu Ketiga (1956).

-----, "Memajukan Bahasa Melayu dan Kesusasteraannya" *Dewan Bahasa* Jilid I, Bilangan I (September 1957).

(いぐち ゆふ 本学非常勤講師)